



© WFP/Tom Haskell

# スチール缶リサイクルで 世界の子供たちに 食糧支援

スチール缶リサイクル協会が  
WFP 国連世界食糧計画の学校給食キャンペーンを支援

スチール缶リサイクル協会では、1973年の設立以降、市町村の分別収集体制の確立およびリサイクル推進のため、さまざまな活動を展開してきた。今回新たに、地球環境の大きな問題の一つである「貧困」に対する支援を行う。WFP 国連世界食糧計画(以下WFP、World Food Programme)の学校給食キャンペーンに賛同し、年間のスチール缶リサイクル量に応じて食糧缶を支援する。

## 環境破壊と貧困の悪循環を 断ち切るために

スチール缶リサイクル協会では、自治体や消費者に対し、一貫して高度な分別収集体制の推進とリサイクル啓発活動を行ってきた。2003年度のスチール缶リサイクル率は87.5%となり、経済産業省の産業構造審議会ガイドラインである85%以上を3年連続で達成した(図1)。2003年度の回収・再資源化によって、名古屋市90万世帯の年間電力消費に匹敵する省エネルギー効果、北九州市43万世帯分の年間CO<sub>2</sub>排出量を削減する効果がある。

そして今年7月から、これまでの活動に加え、新たに「貧困」問題への支援も行うことになった。環境と貧困は密接につながっている。温暖化による

早魃かんばつから飢餓が起こり、逆に貧しいために森林伐採などによって環境破壊につながることもある。

スチール缶リサイクル協会では、この悪循環を根本から断ち切るため「教育」をキーワードに食糧支援を行い、貧困問題と環境問題両方にアプローチすることにした。そこでWFPの学校給食キャンペーンに対し、2003年度のスチール缶リサイクル量79.69万トンに応じて食糧缶8,000缶相当の金額を支援し、ニーズの高い地域へ食糧缶支援を行うことにした。

あわせて、日本の小学生に世界の飢餓を考える機会を提供する。まずWFPの活動を子供たちに紹介し、環境保護の必要性や世界の貧困状況を学んでもらう。そしてスチール缶をリサイクルすることで、世界の貧しい子供たちの

学校給食を支援できることをPRし、スチール缶リサイクルへの関心も高める狙いだ。さらに、日本の子供たちの代表による学校給食の現地視察も実施する予定になっている。

## WFPの 学校給食キャンペーンとは

世界の人口約60億人のうち、約8億3,000万人の人々が飢餓と戦っている(図2)。その多くは、女性と子供だ。7秒に1人の子供が飢えやそれに関係する原因のために亡くなっていると言われ、飢餓の子供約3億人のうち、半数は学校に通っていない。

WFPは、こうした現状に対し、食糧援助によって生活を向上させ、貧困と飢餓を根絶させることを目的に、国連唯一・世界最大の食糧援助機関として

図1 スチール缶リサイクル率の推移

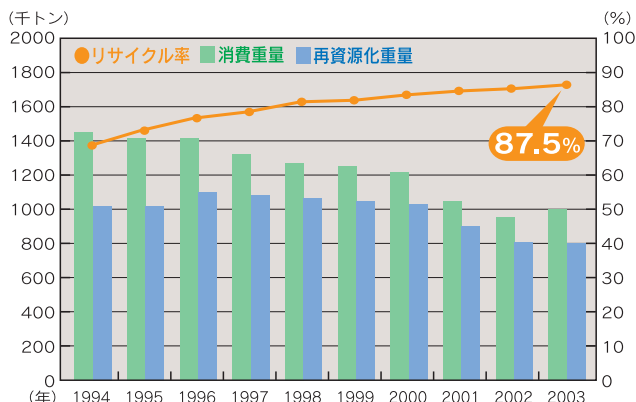


図2 『ハンガーマップ』世界地図



© WFP

1961年に設立され、1963年から活動を開始した。緊急食糧援助以外にも、子供の成長や自立を促すためのプロジェクト食糧援助があり、学校給食キャンペーンはその一つだ。

教育は人材育成のみならず、将来にわたりその地域や国家全体の繁栄につながる重要な貢献となる。また、発展途上国では、1日1食という家庭が多く、学校で給食を食べることは、児童やその親にとって大きな支援になると同時に、子供たちの栄養補給を促し、通学率・就学率を上げる効果がある。2002年には、世界64カ国の約1,560万人の子どもたちに給食を支援した。

また、貧しい家庭では子供たちも重要な労働力となるため、学校に通えないことがある。特に女子は、家事手伝いとして学校に通わせてもらえないケースが多い。そのためWFPでは、学校に来た女子に家族用の食糧も配布し、労働の損失分を補償することで女子の学習機会を創出している。

## 女子教育を支援 パキスタンの例

例えば、イスラム国家であるパキスタンでは国全体の識字率が37%、女子の識字率は男子の識字率の半分と言われている。しかし、WFPの活動が成果を挙げつつある。

同国のアフガニスタン国境沿いにあるバルチスタン地方のクウェット郊外の村では、WFPが調理油配給を申し出たことで関心を持った親たちのグループが、女子の小学校就学を実現するため村長を説得した。その結果、小さな



食糧支援に必要な容器は持ち運びに適した頑丈な「スチール缶」が調理油缶、ツナ缶、ミルク缶等として活躍している。  
© WFP/ Gia Chhatarashvili

2教室だけの女子小学校が開設された。

ここで授業を受けた女子生徒の中には「6年生を修了後もさらに学業を続ける」「イスラム教科専攻のため高等教育へ進学する」と決意を語る児童があり、母親たちも調理油を受け取りに学校へ出かけるうちに娘たちの勉強や成績について語り合うようになり、「学ぶ機会が与えられることによって、将来より良い生活を送れるようになる」と口を揃える。

学校開設による教育環境の改善効果は大きく、現在ではバルチスタン地方全体の就学率は2倍になった。



家に居るのが当然とされてきた女子たちにも学習の機会が与えられる。  
© WFP/ A. Chicheri

## さらに民間支援の輪の拡大を

WFP 国連世界食糧計画 日本事務所  
上級援助関係官 島崎 亮平氏



今年5月、スーダンへの緊急援助のための食糧投下とケニアのスラム街の視察をしてきました。ケニアのスラム街では、食糧入手のために子供たちが犯罪や売春に関わるケースが多く、一旦そうになってしまうと社会復帰は難しいのです。WFPでは学校給食を行い、教育の普及による平和構築を目指しています。

現在、WFPの活動について、「認知」「理解」そして「参加」につながる3ステップを草の根レベルで広げようと模索しています。スチール缶そのものも食用油の容器などで役立っていますが、今回のスチール缶リサイクル協会のように、定期的支援をいただければ、すぐには見えてこなくても成果を少しずつ実感して頂けると思います。また、犠牲になりがちな女性や子供の現状をカウンターパートとして日本の子供たちに知ってもらえる機会を作ることも非常に意義のあることです。

第二次世界大戦後、米国政府だけではなく多くの米国民間人による食糧支援がありました。飽食の時代と呼ばれる今こそ、日本人が民間支援の輪を広げていく時が来ていると思います。

## スチール缶リサイクル協会の 食糧缶支援について

スチール缶リサイクル協会理事長  
(新日本製鉄代表取締役副社長) 宮本 盛規



スチール缶リサイクル協会は、昨年で設立30年を迎えました。長年、業界全体で真摯に取り組んできた結果、市町村の分別収集体制と鉄鋼メーカーの再資源化体制を整備でき、2003年度のスチール缶リサイクル率は87.5%となりました。経済産業省のガイドラインを達成するとともに、世界トップレベルのリサイクル率を維持し、国際的にも高い関心が寄せられています。

地球環境問題を考える上で、リサイクル、資源、地球温暖化はもちろん、貧困も避けては通れない問題です。そこで協会では、WFPの学校給食キャンペーンの趣旨に賛同し、日本のスチール缶リサイクル量に応じて食糧缶の支援を行います。スチール缶を扱っている当協会ならではの、スチール缶を通じた社会貢献を考えました。そして、これは単なる食糧支援ではなく、世界の貧しい子供たちが社会的・経済的に自立できるよう「教育」というチャンスと希望を与えるもので、協会としても日本の子供たちにリサイクルを通して広く世界の貧困を考える機会を与えたいと思っております。

このほか協会では、消費者へのアンケート調査結果を踏まえ、スチール缶リサイクルについてより一層のPR活動に力を入れ、正しい理解促進を図ってまいります。